

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 6 月 7 日現在

機関番号：13101

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2012～2015

課題番号：24530615

研究課題名(和文) 広域避難者への支援を契機とした地域の関係性の再構築

研究課題名(英文) A research for reconstruction of community in the process of support for large-scale evacuees

研究代表者

松井 克浩 (MATSUI, Katsuhiro)

新潟大学・人文社会・教育科学系・教授

研究者番号：50238929

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,700,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、新潟県を主な対象地として、原発事故による広域避難者の受け入れと支援のプロセスが地域の関係性の対自化・再構築へと結びついていることを明らかにした。具体的には、過去の災害経験を振り返ってそこで築かれた関係性や知見のストックを活用する、被災者と支援者の関係性が依存と独立の間にある「インターディペンデンス」という特徴をもつ、等である。避難者の再生に着目すると、時間や空間を考慮しながら社会への回路を結び直すことが必要であることも分かった。

研究成果の概要(英文)：The aim of this study is to clarify the reconstruction of community in the process of reception and support for evacuees from Fukushima now live in Niigata prefecture. That is, the accumulation of experiences of disasters in Niigata makes it possible to mature the skills of support, and "inter-dependence" is the characteristics of support for evacuees. For recovery of the evacuees, most important thing is that the restoration of their social relationships with due regard to "the dimension of existence".

研究分野：社会科学

キーワード：広域避難 東日本大震災 原発事故 コミュニティ 新潟県中越地震 支援

1. 研究開始当初の背景

(1) 本研究は、私が代表を務めた科学研究費補助金・基盤(C)「災害復興過程における地域内社会諸関係の再認識・再構築」(平成20~23年度)の直接の延長線上に構想されたものである。災害は地域社会に大きなダメージを与えるが、他方で、地域内の社会関係の価値を再認識させ、また被災地外の諸主体との新たな連携にもとづいて地域内社会関係を再構築していく側面をもつ。申請者はこのことを、中越地震および中越沖地震の被災地での聞き取り調査、アンケート調査を通じて明らかにし、単著『震災・復興の社会学 2つの「中越」から「東日本」へ』(リベルタ出版、2011年)に取りまとめた。

(2) しかしその研究過程で、とくに「支援」をめぐる課題が浮き彫りになってきた。「支援する・支援される」という一方向的な関係性は、地域の中に依存と反発をつくり出しかねないことも分かった。調査対象地の中には、こうした課題を克服するために、一方向的な関係性の問い直しと支援の日常化に向けて、新たな動きを開始したところもある。災害時(あるいは平時)における支援をめぐる問題は、地域の関係性の対自化・ふり返り(reflection)・更新の重要な契機となりうる。

(3) この点は、これまでの被災地・被災者支援や災害ボランティアに関する社会学的研究にも更新を迫っている。従来はどうしても、支援する側(専門的団体やボランティア個人)に研究の比重がおかれ、支援を受ける側や支援を媒介する地域コミュニティに対する視点は十分ではなかった。支援を必要とする人が日常生活を送る場である地域の社会関係に焦点をおくことで、より双方向的で長期にわたり持続可能な支援、ことさらに支援を意識しないような支援の可能性を構想することができる。

(4) 東日本大震災と原発事故による未曾有の被害は、多くの広域避難者を生み出し、日本全国の自治体や市民が受け入れと支援に乗り出している。避難の規模や今後予想される避難期間の長期化を含め、避難者も受け入れ側も前例のない事態に直面している。故郷を離れた避難者の苦痛を少しでも軽減していくためには、受け入れる地域社会の側の対自化・ふり返り・更新と、避難者をメンバーとして加えた地域内の社会関係の結び直しが必要とされる。

2. 研究の目的

(1) 本研究は、上記の研究経過と課題意識をふまえて、以下の諸点を明らかにしようとするものである。a. 今回の震災と原発事故による広域避難者を、被災地から離れた自治体や市民はどのような地域内の連携・協働の枠組みで受け入れたか、b. この広域避難者の受

け入れと支援は、地域内の種々の社会関係のあり方にどのような形でふり返りを促したか、c. こうしたふり返りは、当該の地域社会にいかなる変容・再構築をもたらしたか、また、その過程に避難者はどのように関与したか、d. さらに、地域の関係性の変容を伴う支援のプロセスは、避難者の再生、アイデンティティの立て直しにどのように寄与できたか、そこに残された課題は何か。

(2) こうした問題を実証的に探求するために、新潟県柏崎市を主な対象地として調査研究を行った。柏崎市は、東京電力柏崎刈羽原子力発電所が立地していることもあって、原発関連企業に仕事をもつ人を中心に、多くの避難者が滞在している。柏崎市では、市内のNPOに委託して避難者見守り支援事業を始めており、福島からの避難者7名を支援員として採用している。この事業に関する調査を継続するとともに、避難者を受け入れた地域住民組織やテーマ型の市民活動による支援についても調査を行う。過酷な原発事故からの避難先が別の原発立地自治体であるという皮肉な事態からも、避難者の葛藤をうかがい知ることができるし、避難者を迎えた地域の側にも複雑な「思い」がある。このことが、地域の社会関係や原発に依存してきた地域のあり方それ自体の捉え直しにどのようにつながっていくのか、時間をかけていねいに跡づけてきた。

(3) その際に、「強い主体」ではなく「弱い主体」から出発するボランティアの論理(西山志保『ボランティア活動の論理』東信堂、2005年)を地域研究に持ちこむことを意図している。西山のいう受動性・身体性・個別性は、被災直後のボランティア活動においてのみでなく、本研究で扱う地域の関係性の再構築過程においても、出発点とされるべきことである。このような視点をもつことにより、関与者の弱さや受動性を契機とし、「支援する・支援される」という一方向的な関係性を超えた新たな社会関係の形成を浮き彫りにできる。その延長線上に、「ふり返り」を含んだ地域の新しい形や地域がそもそも抱えていた問題の発見、また人が人に「寄り添う」とはどういうことかという課題を展望できる。

3. 研究の方法

(1) 上記の課題を果たすために、下記の地域・団体を対象とした調査研究により、実証的な解明を試みた。新潟県柏崎市と新潟市を中心に、福島県の警戒区域内外からの広域避難者およびその支援者を対象とした聞き取り調査と資料収集を継続的に実施した。

(2) 警戒区域である福島県富岡町からの避難者グループの活動を対象に、聞き取り調査と参与観察を行った。避難者が多い地域で実

施されるタウンミーティングなどに参加し、広域避難者の生活の実態や将来展望などを聞き取るとともに、避難元自治体との関係づくりや避難先での住民同士のコミュニティづくり、避難当事者の自治に向けた活動の可能性を探った。

(3) 研究テーマに関する空間的な比較対照を目的として、北九州市で広域避難者支援を実施してきた団体にヒアリングを行った。また、研究テーマに関する時間的な比較対照を目的として、中越地震被災地の長岡市山古志地区、および水俣市の被害地域である熊本県水俣市で被災者と支援者を対象に聞き取り調査を行った。

4. 研究成果

(1) 新潟県では、福島県からの広域避難者に対して、警戒等区域からの強制避難者か区域外の自主避難者か、高齢世代か子育て世代かといった、避難者の属性に対応した多様な支援形態がとられていた。その一方で、支援に取り組む姿勢やコンセプトには、一定の共通性をみることができた。それは、避難者に対する過剰な介入を避けて避難者の「自立」をサポートする、支援の担い手をできるだけ避難者自身にゆだね、それを背後から支える、といった特徴である。手厚い支援とともに、避難者と支援者との適切な距離が重視されていた。

(2) 新潟県内の広域避難者支援団体に着目すると、依存と独立の間にある「インターディペンデンス」という性格が見出せる。対等な「仲間」として避難者とかかわることは、一方的な依存をつくり出すことでも、「自立」の方向に突き放すことでもなく、たがいの自由を支え合うような軽やかな相互依存を続けていくあり方を意味している。

(3) それを可能にしてきたものは、2004年の7.13水害と中越地震、2007年の中越沖地震と連続した災害の経験だろう。新潟県内の自治体や民間団体は、一般の住民を含めて、被災者と支援者の両方の立場を経験してきた。そのため多くの地域で支援者・支援団体が育ち、ほどよい支援への感覚も蓄積された。さらに、途切れなく災害が起こるたびに行政と民間の協力関係のネットワークが広がり、厚みを増してきた。連続する災害経験によって、市民も含めて習得された支援へのスタンスと支援者ネットワークの存在が、新潟県における避難者支援を特徴づけている。

(4) 原発事故による長期・広域避難者は「人生の次元」抜きの「生活の次元」を強いられている。すなわち、時間の蓄積をふまえた未来への展望、被害の真の回復までに要する時間、「根っこ」のある生き方、住み慣れた生活空間での承認等々を失い、しかも失ってい

ることさえ周囲から理解されずに日々の生活に追われている。避難者が再び地に足をつけて前に進んでいくためには、「生活の次元」の再建・維持に加えて、時間的・空間的・関係的な「人生の次元」の再生が不可欠である。

(5) 避難者への支援を一つの契機として、地域の関係性の対自化・再構築への動きが現れつつある。この点を、原発立地地域における原発避難計画の策定と関係づけて明らかにすることが次の課題である。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計 5件)

松井克浩「長期・広域避難とコミュニティへの模索 新潟県への原発避難の事例から」『社会学年報』45, 2016, 査読なし(掲載決定)

松井克浩「「仲間」としての広域避難者支援 柏崎市・サロン「むげん」の5年間」『災後の社会学』4, 63-76, 2016, 査読なし

松井克浩「柏崎市の広域避難者支援と「あまやどり」の5年間」『人文科学研究』138, 65-90, 2016, 査読なし

松井克浩「広域避難調査と「個別性」の問題」『社会と調査』16, 46-51, 2016, 査読なし

松井克浩「新潟県における広域避難者の現状と支援」『社会学年報』42, 61-71, 2013, 査読なし

[学会発表](計 3件)

松井克浩「長期・広域避難とコミュニティへの模索」第62回東北社会学会課題報告「福島」の現在」2015年7月18日, 東北大学(仙台市)

松井克浩「災害からの集落の再生と変容 新潟県山古志地域の事例」日本村落研究学会第62回大会テーマセッション「災害を処遇する家と村」2014年11月2日, グリーンピア三陸みやこ(宮古市)

松井克浩「震災からの地域の復旧・復興」国際地域研究学会大会 2012年度大会企画セッション「地域の発展」2012年12月16日, 新潟県立大学(新潟市)

[図書](計 5件)

高橋若菜編『原発避難と創発的支援 活かされた中越の災害対応経験』本の泉社, 2016
(松井克浩「中越・中越沖から引き継がれた経験知」164-179, を分担執筆)

植田今日子編『災害と村落(年報 村落社会研究 51)』農文協, 2015 (松井克浩「災害からの集落の再生と変容 新潟県山古志地域の事例」27-59, を分担執筆)

栗原隆編『感性学 触れ合う心・感じる身体』東北大学出版会, 2014 (松井克浩「災害

からの復興と「感情」のゆくえ 原発避難の事例を手がかりに」85-102, を分担執筆)

栗原隆編『感情と表象の生まれるところ』ナカニシヤ出版, 2013 (松井克浩「場所」をめぐる感情とつながり 災害による喪失と再生を手がかりとして」143-158, を分担執筆)

吉原直樹編『防災の社会学 防災コミュニティの社会設計に向けて(第二版)』東信堂, 2012 (松井克浩「防災コミュニティと町内会 - 中越地震・中越沖地震の経験から」71-97, を分担執筆)

〔その他〕

(講演) 松井克浩「福島第一原発事故の概要と原発避難の問題」(トヨタ財団助成研究シンポジウム「ポスト福島第一原発事故における地域コミュニティの持続的「発展」「再生」の可能性」, 2014年10月25日, 新潟市)

(講演) 松井克浩「福島第一原発事故の概要と原発避難の問題」(トヨタ財団助成研究シンポジウム "Sustainable Development and Possibility of Revitalization of Local Community after Fukushima Disaster", 2014年10月18日, 延世大学校・ソウル市)

(報告書)『新潟県長岡市山古志地域 こころとからだの健康9年後調査報告書』新潟県長岡市山古志支所・新潟県精神保健福祉協会こころのケアセンター, 2014 (松井克浩「インタビュー調査の結果から」20-33, を分担執筆)

(講演) 松井克浩「「故郷」の喪失と再生」(東北大学グローバル安全学トップリーダー育成プログラム「災害と社会変動 安全・安心に生きるために」2013年11月9日, 東北大学)

(講演) 松井克浩「災害後の地域のつながりと“こころの問題”」(新潟 PTSD 対策専門研修会「こころを大切にすること～被災者のこころの回復を願って 中越から東北へ～」2013年8月26日, 新潟市)

(講演) 松井克浩「災害への対応と地域コミュニティ」(愛媛大学人文学科講演会, 2013年3月13日, 愛媛大学)

(研究会報告) 松井克浩「中越地震の経験から考えること」(日本村落研究学会東北地区研究会, 2013年1月12日, 東北大学)

(講演) 松井克浩「震災復興とコミュニティの役割」(華東理工大学社会公共管理学院講演, 2012年12月20日, 中国・上海市)

(公開講座) 松井克浩「震災とコミュニティ: 中越から東日本へ」(新潟大学公開講座「震災とコミュニティ」2012年10月6日, 新潟市)

(講演) 松井克浩「復興と女性の力 中越から東日本へ」(陸前高田市地域女性団体協議会「第20回 女性のつどい」2012年8月19日, 陸前高田市)

(研究会報告) 松井克浩「新潟県内の原発避難者の構成・変化と支援状況」(社会学 4

学会合同研究・交流集会 「「原発避難」を捉える/考える/支える」, 2012年6月, 明治学院大学)

6. 研究組織

(1) 研究代表者

松井 克浩 (MATSUI KATSUHIRO)

新潟大学・人文社会・教育科学系・教授

研究者番号: 50238929